新訂

尋常小學唱歌

伴奏附

第四學年用

文部省

K1307
3.1
4

新訂

尋常小學唱歌

附伴奏

第四學年用

文部省

昭和八年

緒　言

一、本書ハ音樂教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ從來本省著作ニ係ル「尋常小學唱歌」ニ改訂ヲ加ヘタルモノナリ。

二、本書ハ毎卷二十七章トシ、取扱者ニ選擇ノ餘地ヲ與ヘタリ。

三、本書ノ歌詞ハ、舊歌詞中ノ適切ナルモノ、新作ニ係ルモノ、及ビ尋常小學國語讀本・尋常小學讀本中ノ韻文ノ一部ヨリ成ル。

四、本書ノ歌詞ハ努メテ材料ヲ各方面ニ採リ、文體・用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。

五、本書ノ教材排列ハ强ヒテ程度ノ難易ノミニヨラズ、一面季節ニツキテモ考慮セリ。

六、本書ハ取扱者ノ便宜ノタメ、唱歌曲ノミノ樂譜ヲ揭ゲタルモノト、伴奏附ノ樂譜ヲ揭ゲタルモノト、二種類ヲ作製セリ。教授ニ際シテハ其ノ何レヲ採用スルモ可ナリ。

七、伴奏附ノ樂譜ヲ使用スル場合ニハ、前奏・後奏ノ如キハ時トシテ省略スルモ可ナリ。

昭和七年十一月　　文　部　省

目　次

一　春の小川……2
二　かげろふ……6
三　ゐなかの四季……10
四　靖國神社……14
五　蠶……18
六　五　月……20
七　藤の花……24
八　動物園……26
九　お手玉……28
一〇　曾我兄弟……32
一一　夢……34
一二　雲……38
一三　漁　船……42
一四　夏の月……44
一五　牧場の朝……48
一六　水　車……52
一七　廣瀨中佐……54
一八　たけがり……56
一九　山　雀……60
二〇　霜……62
二一　八幡太郎……64
二二　村の鍛冶屋……68
二三　餅つき……72
二四　雪合戰……76
二五　近江八景……78
二六　何事も精神……82
二七　橘中佐……86

春の小川

♩= 104

Fine

8va.

mf 軽快に

mp

ペダルを使用して

一ハ ー ル ノ ヲ ガ パ ハ サ ラ サ ラ ナ ガ ル
二は ー る の を が は は さ ら さ ら な が る
三ハ ー ル ノ ヲ ガ ハ ハ サ ラ サ ラ ナ ガ ル

左手軽く

mf

キ ー シ ノ ス ミ レ ヤ レ ン ゲ ノ ハ ナ ニ
え ー び や め だ か や こ ぶ な の む れ に
ウ ー タ ノ ジャウ ー ズ ヨ イ ト シ キ コ ド モ

mp

ニ ー ホ ヒ メ デ タ ク イ ロ ウ ツ ク シ ク
けふ ー ー も い ち に ち ひ な た に い で て
コ ー ヱ ヲ ソ ロ ヘ テ ヲ ガ ハ ノ ウ タ ヲ

f

D.C.

サ ー ケ ヨ サ ケ ヨ ト サ サ ヤ ク ゴ ト ク
あ ー そ べ あ そ べ と さ さ や く ご と く
ウ ー タ ヘ ウ タ ヘ ト サ サ ヤ ク ゴ ト ク

8va.

p

mp

D.C.

ペダルを用ひずに

一、春の小川

一、春の小川はさらさら流る。
岸のすみれやれんげの花に、
にほひめでたく、色うつくしく
咲けよ咲けよと、ささやく如く。

二、春の小川はさらさら流る。
蝦やめだかや小鮒の群に、

今日も一日ひなたに出でて
遊べ遊べと、ささやく如く。

三、春の小川はさらさら流る。
歌の上手よ、いとしき子ども、
聲をそろへて小川の歌を
うたへうたへと、ささやく如く。

かげろふ

♪=138

mp

ーユ ラ ユ
ニゆ ら ゆ

mf mp p pp mp

ラ ユ ラ キ ラ キ ラ キ ラ ハ ル ノ ヒ ノ
ら ゆ ら き ら き ら き ら は る の ひ の

mp mp

mf

ヒ カ リ ヲ ウ ケ ー テ イ シ ノ ホ ト リ ニ
の ど け さ み せ ー て く さ の は ず ゑ に

mf mf

mf

ハ シ ノ ウ ヘ ニ モ ユ ル カ ゲ ロフ ー
は な の う へ に も ゆ る か げ ろふ ー

mf mf

f p

ミ チ ユ ク ヒ ト ノ タ モ ト ニ モ ー ツ レ
く づ れ て た ち て み だ れ て ゆ ー れ て

f p

mp ril.

ト ビ カ フ テフ ー ノ ハ カ ー ゼ ニ ユ レ テ
あ る か と み れ ば は や ー か げ も な く

mp ril.

二、かげろふ

一、ゆら　ゆら　ゆら
　きら　きら　きら
春の日の光を受けて、
石のほとりに、　橋の上に
燃ゆるかげろふ。
道行く人の、袂にもつれ、
飛びかふ蝶の羽風にゆれて。

二、ゆら　ゆら　ゆら
　きら　きら、　きら
春の日ののどけさ見せて、
草の葉末に、　花の上に
燃ゆるかげろふ。
くづれて立ちて、　亂れてゆれて、
あるかと見れば、　はや影もなく。

わなかの四季

♪=116

mf

一ミチヲハサンデ　ハタイチメニンニデ
二ならぶすげがさ　ハすずトしいこスンデ
三ニヒヤクトヲカモ　ハすコトナクのそ
四そだをりたくわろ　りそばで

mf

ムギハホガデル　ナハハナザカリ
うたひながらに　うゑゆくさなへ
ムラノマツリノ　タイコガヒビク
よるはよもやま　はなしがはずむ

p

ネームルテフーテフ　トビタツヒバリ
ナーがいなつのひ　いつしかひくれて
イーネハミガイル　ヒヨリハツヅク
はーは、がてぎはの　だいこんなます

p

フークヤハルカゼタモトモカルク
うーゑるーてヒロゲテのトきげソうくテ
カーツーもわなかのとニかソカごシな
こーれ　　　　　しこざか

mf

アチラコチラニクハツムかヲトメば
かへるみちみちあとみかへれテ
モミニシアゲテタソラニツメと
たなのもちひくねずみのお

mf

ヒマシとマシニハルゴモフトル
はずゑはずゑによつゆがひかる
カナイてのロツばにエガホニエガホ
ふけてのきばにゆきふりつもる

三、ゐなかの四季

一、道をはさんで畑一面に、
麥は穗が出る、菜は花盛。
眠る蝶蝶、とび立つひばり、
吹くや春風、たもとも輕く、
あちらこちらに桑つむ少女、
日ましに日ましにはるごも太る。

二、ならぶ菅笠、涼しいこゑで
歌ひながらに植行く早苗、
ながい夏の日いつしか暮れて、
植ゑる手先に月かげ動く。
かへる道道あと見かへれば、
葉末葉末に夜つゆが光る。

三、二百十日も事なくすんで、
村の祭の太鼓がひびく。
稻は實がいる、日和はつづく、
刈つて、ひろげて、日に乾かして、
もみに仕上げて、俵につめて、
家内そろつて、笑顔に笑顔。

四、そだを折りたくゐろりの側で、
夜はよもやま話がはずむ。
母がてぎはの大根膾、
これもゐなかの年こしざかな。
棚の餅ひく鼠の音も
更けて、軒端に雪降積る。

靖國神社

♩=66

一ハ一ナハサクラギヒトハブシ
ニいのちはか一ろくぎはおもし

mf

ソノサクラギニカコマルル
そのぎをふみておほきみに

ヨヲヤスク一ニノミヤシロヨ
い一のちささげしますらをよ

ミクニノタ一メニイサギヨク
か一ねのとりわのおくふかく

ハ一ナトチリニシヒトビトノ
かみがきた一かくまつられて

f

タ一マハココニゾシヅマレル
ほまれはよ一よにのこるなり

mf

四、靖國神社

一、花は櫻木、人は武士。
その櫻木に圍まるる
世を靖國の御社よ。
御國の爲に、いさぎよく
花と散りにし人人の
魂は、ここにぞ鎭まれる。

二、命は輕く、義は重し。
その義を踐みて大君に
命ささげし大丈夫よ。
銅の鳥居の奥ふかく
神垣高くまつられて、
譽は世世に殘るなり。

蠶

♩= 112

一カゼアタタカキ　ゴグツーノーハジメ
二よたびのねむり　いつしーかーす、ぎて
三カミモムスバズ・　ヨルサーヘーイネズ

サトノヲトメガ　トルヤハバウキ
はしのふとさば　こゆびとなりぬ
ココロツクシテ　ヒトツキアマリ

ハキオローシクール　ハルノカ、ヒコ
きそひきーそひーて　くははむおと
ツトメシーカヒーノ　ミエタルケフー

サナーガラクローキ　チーリノーゴトク
このーはにあめーの　そーそぐーごとく
ウレーシヤマユーハ　ヤーマノーゴトク

五、蠶

一、風暖き五月のはじめ、
里の少女が取るや羽箒。
掃きおろしたる春のかひこ、
さながら黒き塵の如く。

二、四度の眠いつしか過ぎて、
箸の太さは小指となりぬ。
きそひきそひて桑はむ音、
木の葉に雨のそそぐ如く。

三、髪も結ばず、夜さへ寢ねず、
心つくして一月あまり
努めしかひの見えたる今日、
うれしや、繭は山の如く。

五　月

♩=46

mp

一カゼソタルゴ
ニかぜかをるご

con Ped.

グワツノヤマヲミアグレバヤ
ぐわつのはまにきてみればは

マヲオホヘルシヒノキノソ
まにさいたるはまなすのす

mf

カバアヲバノヒニハエーテサ
なにはひつつひにてりーてゆ

mp

ソサソユラグイサーギョササ
らゆらゆらぐうつーくしささ

p

ナガライキテアルヤウーニ
ながらものをいふやうーに

六、五月

一、風わたる

五月の山を見上ぐれば、
山をおほへる椎の木の、
若葉・青葉の陽に映えて、
さわさわゆらぐいさぎよさ。
さながら生きてあるやうに。

二、風かをる

五月の濱に來て見れば、
濱に咲いたるはまなすの、
砂にはひつつ陽に照りて、
ゆらゆらゆらぐ美しさ。
さながらものをいふやうに。

藤の花

♩=104

一ノヤマモカスム　ハルサメノ
二ひばりのこゑは　ゆふーぞらに

ハーレテナゴリノミヅカサニ
きーえてこなたのやぶばたや

クルマハゲシヤフヂノハナ
ほむぎにどーどくふぢのはな

シブキニヌレテヒニハユル
しづかにゆれてひはくるる

七、藤の花

一、野山もかすむ春雨の
晴れて、なごりの
「水嵩に車はげしや藤の花。」
しぶきに濡れて、日に映ゆる。

二、雲雀の聲は夕空に
消えて、此方の
「藪畑や穂麥にとどく藤の花。」
しづかに搖れて、日は暮るる。

動物園

♩=76

一 ドウ ーブツエン ノ ノドカナ ゴゴハ
二 ら いおんも とらも ねむつて ゐるが
三 キ ノボリジャウズ ブランコ ジャウーズ

mf

クジャクガ スツカリ トクイニ ナツテ
ら くだは のんきな とぼけた かほで
オ サルハ イツデモ アイキャウ モノヨ

ウチヂユウ イツパイ ヒロゲテ ミセル
せ んべい たべては けろりと してる
ガ テウノ カナデル オーケストラニ

キンピカモヤウノ ハレギノ イシャウー
こきやうーの さばくも わすれたやうーに
ヨチヨチダンスヲ アヒルガヲドル

f

八、動物園

一、動物園ののどかな午後は、
孔雀がすつかり得意になつて、
うち中一ぱいひろげて見せる、
金びか模様の晴着の衣裳。

二、ライオンも、虎も、眠つてゐるが、
駱駝は、のんきなとぼけた顔で、
煎餅たべては、けろりとしてる、
故郷の沙漠も忘れたやうに。

三、木のぼり上手、ぶらんこ上手、
お猿はいつでも愛敬者よ。
鷲鳥のかなでるオーケストラに、
よちよちダンスを、あひるが踊る。

お手玉

♩=100

一ヒイ フウ ミヨ イツツノ アツカヒ
二しろ くろ あか あを むらさき くはへて
三ウヘ シタ タテ ヨコ リヤウ ーテノ ハヤワザ

テサキノ ハクラキ ヒトツニウ ーー
いつつの おてだま あーやにとん ー
ミゴトニ ウケトメ イーツツイツ ー

ケ ーー テ サラリト ナゲレバ
だ ーー り ちどりに ぬけたり
イ ーー ロ ノコラズ ソロヘテ

ミダレテ オチテハ ハナモヤウ ー ハナ
とびかひ ゆきかふ てふ ー のまひ てふ ー
マヅマヅ イツクソン カシマシタ カシ

モ ーー ヤウ ーー ー
の ーー ま ーー ひ
マ ーー シ ーー タ

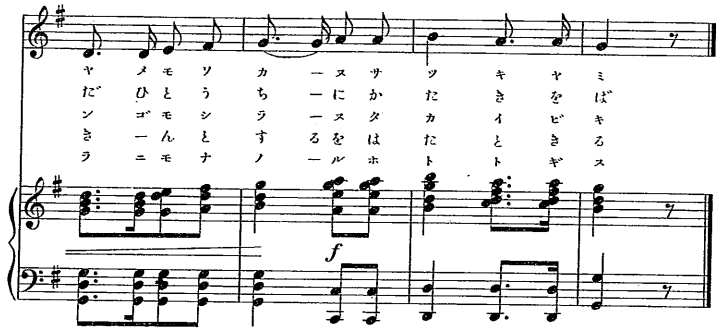
九、お手玉

一、一・二・三・四、　五つのあつかひ、
手先のはたらき、
一つに受けて、
さらりと投げれば、
みだれて落ちては
花もやう、　花もやう。

二、白・黒・赤・青、　紫加へて、
五つのお手玉、
あやに飛んだり、

ちどりにぬけたり、
飛びかひ行きかふ
蝶のまひ、　蝶のまひ。

三、上・下・縱・横、　兩手の早わざ、
みごとに受止め、
五つ五色
殘らず揃へて、
まづまづ一貫
かしました、　かしました。



一〇、曾我兄弟

一、富士の裾野の夜はふけて、うたげのとよみ静まりぬ。
屋形屋形の灯は消えて、あやめも分かぬさつきやみ。

二、「來れ、時、致、今宵こそ、十八年のうらみをば。
「いてや、兄上、今宵こそ、ただ一撃に敵をば。」

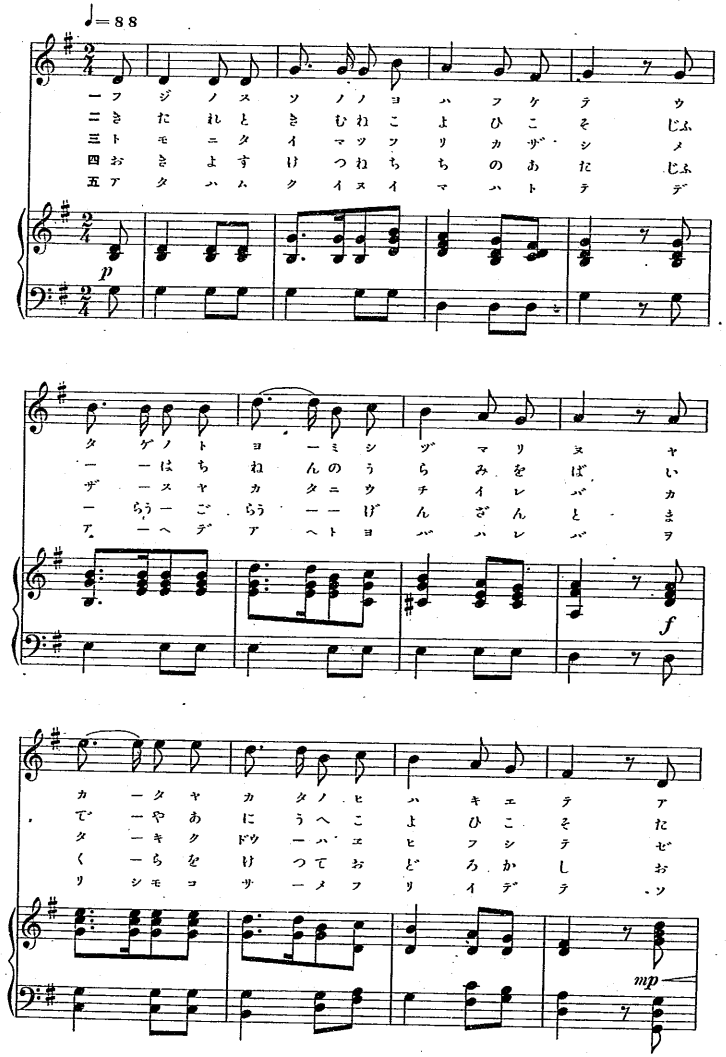
三、共に松明ふりかざし、目ざす屋形にうち入れば、
かたき工藤は酔臥して、前後も知らぬ高鼾。

四、「起きよ、祐經、父の仇、十郎、五郎、見參。」と、
枕を蹴つておどろかし、起きんとするをはたと斬る。

五、仇は報いぬ、今はとて、「出合へ、出合へ。」と呼ばはれば、
折しも小雨降りいでて、空にも名のるほととぎす。

曾我兄弟

♩=88



夢

♩= 84

pp

p

ー キ ン ノ ジ ドウ ー シヤ ニ
ニぎ ん の ひ かう ー き に

p

cresc.

トビノ ル ト ハシルヨ ハシルヨ
とびの る と あがるよ あがるよ

cresc.

mf

ドコーマ デ モ オホキナミ チヲ マツシクラ
どこーま で も かさなるく ちな つきぬけて

mf

p

f

トウ ー トウ ー ガケカラ サカサマニ
とう ー とう ー くわせい の せかいへと

f

mp

オチタト オモーヘバ ユノダツタ
ついたと おもーへば ゆめだつた

mp

p

pp

sf

二、夢

一、金の自動車に飛乘ると、
走るよ走るよ、
何處までも、
大きな道をまつしくら、
とうとう崖からさかさまに、
落ちたと思へば、
夢だつた。

二、銀の飛行機に飛乘ると、
上るよ上るよ、
何處までも、
重なる雲を突拔けて、
とうとう火星の世界へと、
ついたと思へば、
夢だつた。

雲

♩= 104

mf

一 ア サヒーニ モ ユレーバ モ ミノキヌ
二 と きにーは つ らなーる み ねとなり
三 ハ ルケーキ ヤ マノーハ ト ホキオキ

ユフ ーヒーニ ハ ユレーバ ニ シキニテ
と きにーは か さなーる な みとみえ
シ ヅカーニ ヤ スムート ミ ルウチニ

f

ハ レタルーソ ラノ シ ロムクーハ
あ るひはーけ もの と りのはーね
オ ホヅラーソ タリ ウ ミヲコーエ

ア メフル マ ーヘニ ス ミヅメート
う ーをの う ろこと く さぐさーに
ア ラシヲ オ ーコシ ア メヲヨービ

p

カ ハルーヅー フ シギ ク モーノ イ ロ
か はるーぞー ふ しぎ く もーの さ ま
カ ハルーヅー フ シギ ク モーノ リ ザ

一三、雲

一、朝日に燃ゆればもみの絹、
夕日に映ゆれば錦にて、
晴れたる空の白無垢は、
雨降る前に墨染と、
變るぞ不思議、雲のいろ。

二、時には連なる峯となり、
時にはかさなる波と見え、

あるひは獸、鳥のはね、
魚のうろこと種種に、
變るぞ不思議、雲のさま。

三、遙けき山の端、遠き沖、
しづかに休むと見る中に、
大空わたり、海を越え、
あらしを起し、雨をよび、
變るぞ不思議、雲のわざ。

漁船

♩= 76

一 エンヤラ エンヤラ ロビヤウーシ ソロヘテ
二 ゆらりや ゆらりと なみまに ゆられて
三 エンヤラ エンヤラ エモノニ イサンデ

f

アサヒノ ミナトヲ コギダス レフーセン
いそには あみぶね おきには つりぶね
イリヒノ オキヲバ イソイデ コグフネ

ミヨミヨ アノクモ ケフーコソ タイレフー
みよみよ あれみよ かかるは とれるは
ミヨミヨ ハマベニ ツマコガ ムカヘル

mp mf

ソレコゲ ソレコゲ オモカヂ トリカヂ
あみにも いとにも さかなの かずかず
ソレコゲ コゲヨヤ ロビヤウーシ ハヤメテ

f

一三、漁船

一、えんやら、えんやら、艪拍子そろへて
朝日の港を漕出すれふ船。
見よ、見よ、あの雲、今日こそ大れふ。
それ、漕げ、それ、漕げ、おも舵とり舵。

二、ゆらりや、ゆらりと、浪間に搖られて、
磯には網船、沖には釣船。
見よ、見よ、あれ、見よ。かかるは、捕れるは。
網にも、絲にも、魚のかずかず。

三、えんやら、えんやら、獲物に勇んで
入日の沖をば急いで漕ぐ船。
見よ、見よ、濱邊に妻子が迎へる。
それ、漕げ、漕げよや、艪拍子早めて。

夏の月

♩=108

mp

ス ズシイ カゼニ ユラユラト
ニす ずしい かぜに ゆらゆら と

mf

ナミウッヒロイ イナダノウヘニ
ゆられる かやの なかから みれば

mp

イツノマニ ウキデタカ マンマルイ ナツノツキ
いつのまに でてきたか まるいな なつのつき

キレイナ カホシテ ニコニコト
うれしい かほして にこにこと

mf

ソラカラ ワタシヲ ナガメテル
まどから わたしを のぞいてる

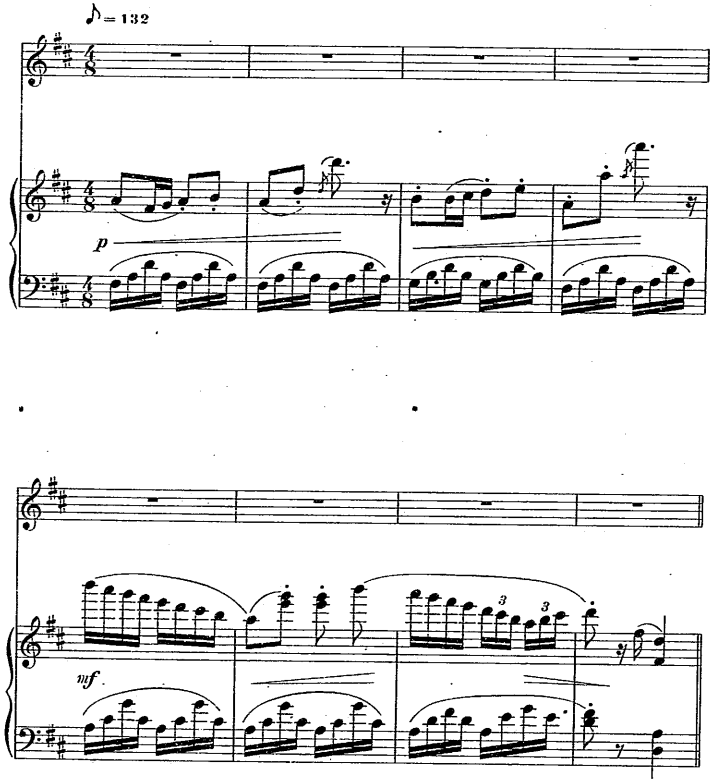
二、涼しい風に、　ゆらゆらと
ゆられる蚊帳の中から見れば、
いつの間に出て來たか、
また此所へ夏の月。
嬉しい顔して、　にこにこと、
窓から私をのぞいてる。

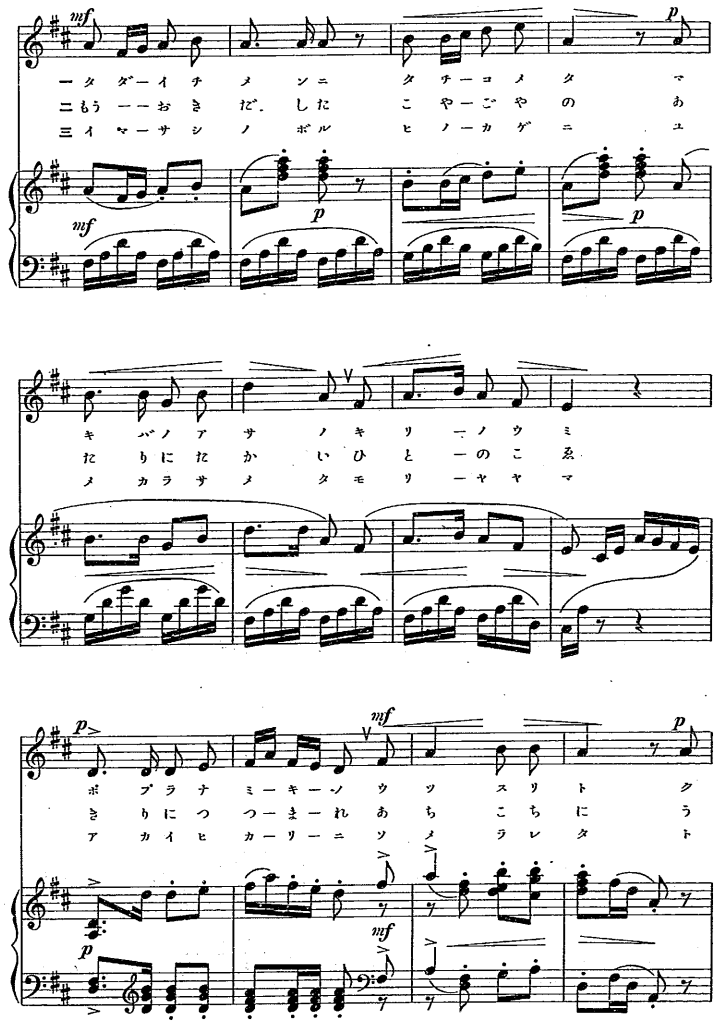
一四、夏の月

一、涼しい風に、　ゆらゆらと
波うつ廣い稻田の上に、
いつの間に浮出たか、
まんまるい夏の月。
きれいな顔して、　にこにこと、
空から私をながめてる。

牧場の朝

♪=132



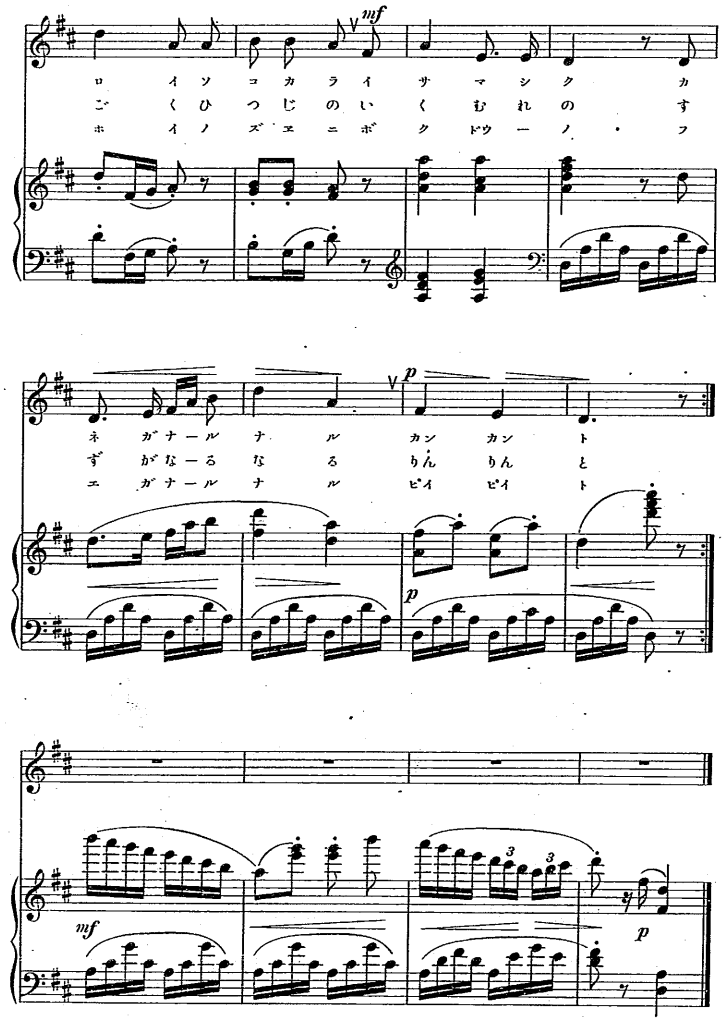

一タダーイチメンニタチーコメタマ
二もう一ーおきだ。したこやーごやのあ
三イヤーサシノボルヒノーカゲニユ
キバノアサノキリーノウミ
たりにたかいひとーのこゑ
メカラサメタモリーヤヤマ
ポプラナミーキーソウツスリトク
きりにつつーまーれあちこちにう
アカイヒカーリーニソメラレタト

一五、牧場の朝

一、ただ一面に立ちこめた牧場の朝の霧の海。
　ポプラ並木のうつすりと黒い底から、勇ましく
　　鐘が鳴る鳴る、かんかんと。

二、もう起出した小舍小舍のあたりに高い人の聲。
　霧に包まれ、あちこちに、動く羊の幾群の
　　鈴が鳴る鳴る、りんりんと。

三、今さし昇る日の影に夢からさめた森や山。
　あかい光に染められた遠い野末に、牧童の
　　笛が鳴る鳴る、びいびいと。



水　車

♩=132

mf　sfz

mp　mf

一モモノハナチル　ヲガハノミヅニ　ヒトツカカツタ
二つきのながれる　をがはのみづに　ひとつかかつた

mp　p　mf

mp　mf

ミヅグルマ　ノドカニテラス　ハルーノヒ
みづぐるま　みぎはのむしの　なくーねに

p　mf

f　mf

アビテ　コツトン　コツトン　クルマハマハル
つれて　こつとん　こつとん　くるまはまはる

f　mf

f

コツトン　コツトン　クルマハマハル
こつとん　こつとん　くるまはまはる

f

一六、水　車

一、桃の花散る小川の水に、
一つかかつた水車。
のどかに照らす
春の日浴びて、
こつとん、こつとん、
車は廻る。
こつとん、こつとん、
車は廻る。

二、月の流れる小川の水に、
一つかかつた水車。
汀の蟲の
鳴く音につれて、
こつとん、こつとん、
車は廻る。
こつとん　こつとん、
車は廻る。

廣瀬中佐

♩=112

一トドロクツツオトトビクルダングワン
二せんないくえなくたづぬるみたび
三イマハトボートニウツレルチユウーサ

アラナミアーラフデツキノウヘニ
よーべどこたへずさがせどみえず
トビクルターマニタチマチウセテ

ヤーミヲツラスクチユウーサノサケビ
ふーねはしだいになみまにしづみ
リヨージユンカウーグソイウラミゾフカキ

スギノハイヅコースギノハキズヤ
てきだんいよいよあたりにしげし
グンシンヒロセトソノナノコレド

一七、廣瀬中佐

一、轟く砲音、飛來る彈丸。
荒波洗ふデツキの上に、
闇を貫く、中佐の叫。
「杉野は何處、杉野は居ずや。」

二、船内隈なく尋ぬる三度。
呼べど答へず、さがせど見えず。
船は次第に波間に沈み、
敵彈いよいよあたりに繁し。

三、今はとボートにうつれる中佐、
飛來る彈丸に忽ち失せて、
旅順港外、恨ぞ深き、
軍神廣瀬と其の名殘れど。

たけがり

♩=84

mf

アキノヒノソラスミツタリ
たどりゆくほそみちづたひ

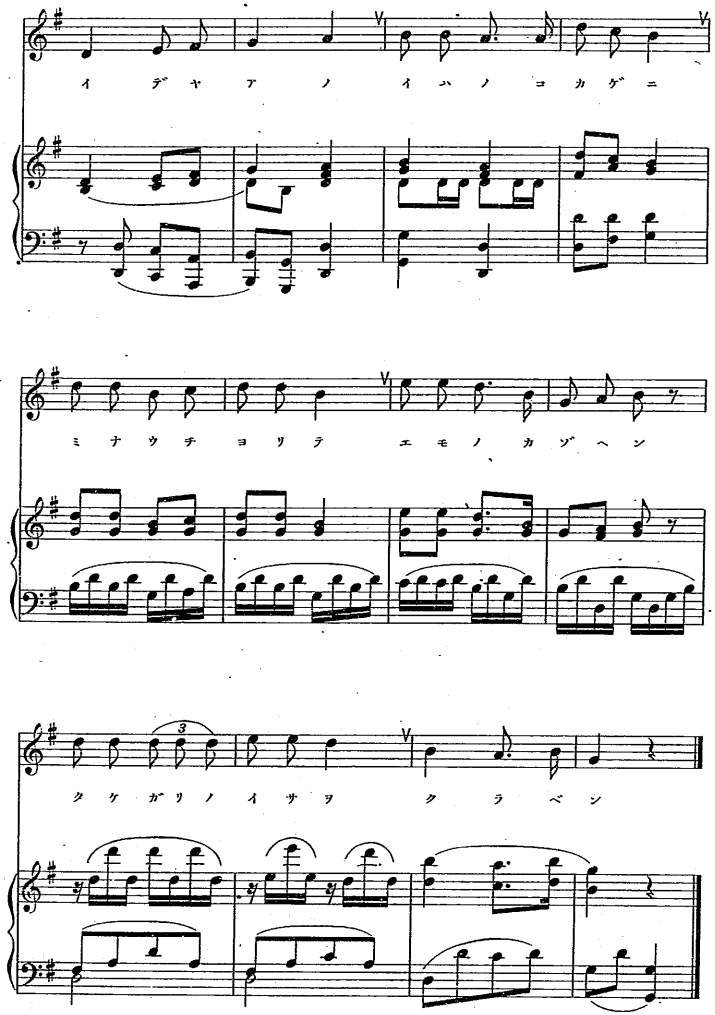
カゼアタタカニサテモヨキヒヤ
はやかうーばしくきのこにほへり

ヤマアソビスルニヨキヒヤ
やまかぜにきのこかをれり

トモヨコヨテカゴヲモチテ
うれしこのまつのねもとに

イザウラヤマニキノコタヅネン
まづみつけつどたかくよぶこゑ

ヤマフカクユキテタヅネン
やまびこにひびくよびごゑ



一八、たけがり

秋の日の空すみわたり、
風暖に、さてもよき日や。山遊するによき日や。
友よ、來よ、手かごを持ちて。
いざ、裏山にきのこたづねん、山深く行きてたづねん。
たどり行く細路づたひ、
はや、かうばしくきのこ匂へり。山風にきのこかをれり。
「うれし、この松の根もとに、まづ見つけつ。」と高く呼ぶ聲、
やまびこにひびく呼聲。
いでや、あの岩の小かげに、皆うちよりてえもの數へん、
茸狩のいさをくらべん。

山雀

♩=112

mf

一 クル クル マハル ノガマハル
二 よい こら ひいた つなひいた
三 ツケ ツケ カネヲ ヒイフウミ

mf

トンバウ ガヘリ チウーガヘリ
もいちど ひいた つなひいた
オテラノ カネガ ナルトキハ

mp

カハセニ カカル ミヅグルマ
つるべの みづを こぼすまい
オマヘモ ヤマガ コヒシカロ

mp

mf

ピイ ピイ ヤマガラ ピイヤマガラ
ぴい ぴい やまがら ぴいやまがら
ピイ ピイ ヤマガラ ピイヤマガラ

mf

一九、山雀

一、くるくる廻る、目が廻る、
とんぼう返り、宙返り、
川瀬にかかる水車。
ぴいぴい山雀、ぴい山雀。

二、よいこら引いた、綱引いた、
もいちど引いた、綱引いた。
釣瓶の水をこぼすまい。
ぴいぴい山雀、ぴい山雀。

三、つけつけ鐘を、一・二・三。
お寺の鐘が鳴る時は、
お前も山がこひしかろ。
ぴいぴい山雀、ぴい山雀。

霜

♩= 96

mf　mp　dim.

p　mf　p

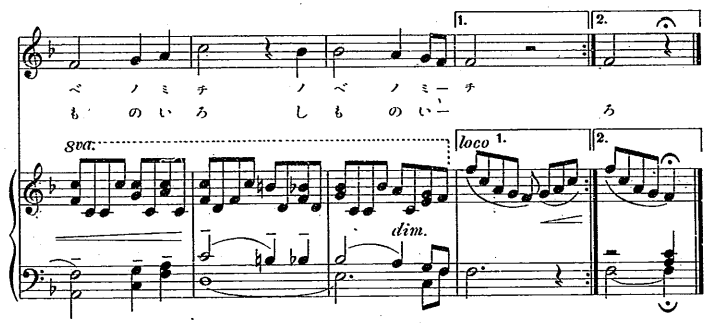
ニ　ア　リ　ア　ケ　ノ　キ　エ　ニ　シ　カ　ー　ゲ　ヲ　ま

mf　p

カ　リ　ニ　ー　テ　マ　ダ　ヨ　ハ　ソ　ー　カ　ー　シ　ノ

つ　の　は　ー　に　し　ば　ー　し　の　ー　こ　せ　る　し

mf　p



二〇、霜

一、笹の葉の
白きは霜の光にて、
まだ夜は深し、
野邊の道、
野邊の道。

二、有明の
消えにし影を、松の葉に
しばし殘せる
霜の色、
霜の色。

八幡太郎

♩= 112

ーママーノヒヅメモニホフマデミ
ニおちゆくてきーをよびとめてこ

mp　mf

チーモセニチルヤマザクラカナシ
ろものたてーはほころびにけり・て

p　mp

バシナガメテフクカゼヲナ
きはみかへりとしをへしい

p

コソノセキートオモヘドモカ
とーのみだれのくるしさにつ

mp

ヒナキナヤトホホエミテユ
けたることのめでたきにめ

mf

ルクウタセシヤサシサヨ
でてゆるししやさしさよ

p

三、八幡太郎

一、駒のひづめも匂ふまで、
「道もせに散る山櫻かな。」
しばしながめて、「吹く風を
勿來の關と思へども、」
かひなき名やとほほ笑みて、

ゆるく打たせしやさしさよ。
二、落ちゆく敵をよびとめて、
「衣のたては縫びにけり。
敵は見かへり、「年を經し
絲のみだれの苦しさに、」
つけたることとのめてたきに、
めててゆるししやさしさよ。

村の鍛冶屋

♩= 84

f (槌の響のつもりで)

mp

一 シバシモ ヤマズニ ツチウツ ヒビーキ
二 あるじは なだかき いつこく おやーぢ
三 カタナハ ウタネド オホガマ コガーマ
四 かせぐに おひつく びんぼふー なくーて

mf

トビチル ヒノハナ ハシル ユダーマ
はやおき はやねの やまひ しらーず
マグハニ サクグハ スキヨナ ターヨ
めいぶつ かぢやは ひびに はんーじやう

フイーゴノ カゼーサヘ イキヲモ ツーガーズ
てつーより かたーしと ほこれる うーでーに
ヘイーソノ ツチーモノ ヤスマズ ウーチーテ
あたーりに るかーなき しごとの ほーまーれ

p

シゴトニ セイダス ムラノ カヂーヤ
まさりて かたきは かれが ここーろ
ヒゴトニ タタカフ ランダノ テキート
つちうつ ひびきに まして たかーし

mf

dim.

三、村の鍛冶屋

一、しばしも止まずに槌うつ響。
飛散る火の花、はしる湯玉。
ふいごの風さへ息をもつがず、
仕事に精出す村の鍛冶屋。

二、あるじは名高きいつごく老爺、
早起・早寝の、病知らず。
鐵より堅しとほこれる腕に
勝りて堅きは、彼がこころ。

三、刀はうたねど、大鎌・小鎌、
馬鍬に作鍬、鋤よ、鉈よ。
平和のうち物休まずうちて、
日毎に戰ふ、懶惰の敵と。

四、かせぐにおひつく貧乏なくて、
名物鍛冶屋は日日に繁昌。
あたりに類なき仕事のほまれ、
槌うつ響にまして高し。

餅つき

♩=100

軽快に

fp　f　f　mp

mp

一ケフ　ーハ　ウチデハ　モチーツキ　ヂヤ
二けふ　ーは　となりの　もちーつき　ぢや

p

f　ゆるやかに　p a tempo

ペツタンコ　ペツタンコ　オトウサンガ　ツイテ
ぺつたんこ　ぺつたんこ　おとうさんが　のして

f　lento　lunga　p a tempo

mf

オカアサンガ　テガヘシ　ネエサン　テツーダヒ
おばあさんも　てつだひをぢさん　をばーさん

mf

p　f

ウチヂユウーー　グルグルー　テンテコ　マヒヂヤ
はちまきー　たすきでー　てんてこ　まひぢや

p　f

mp

シハスハ　ミジカイ　ソレツケ　ソレツケ
おしやうぐわつは　めでたい　それつけ　それつけ

p　mp

二三、餅つき

一、今日はうちでは餅つきぢや。
　べつたんこ、べつたんこ。
お父さんがついて、
お母さんが手がへし、
　ねえさん手つだひ、
うち中ぐるぐる、
てんてこまひぢや。
　師走は短い、
　それつけ、それつけ。

二、今日は隣の餅つきぢや。
　べつたんこ、べつたんこ。
お爺さんがのして、
お婆さんも手つだひ、
　をぢさん・をばさん、
鉢巻・たすきで、
てんてこまひぢや。
　お正月はめでたい、
　それつけ、それつけ。

雪合戰

♩=76

一ハレタル アーサーノ ユキノハラ
二あたりて ひーるーむ びけふーもの
三ゲキセン イーマート ミルウチニ

ヒガシト ニーシーニ タチワカレ
おそれず すーすーむ がうーのもの
ウシロニ ヒービーク キウーセンノ

ヨウイハジメノコエノシタ
ゆきをけちらしゆきをあび
ラッパトトーモニシヒガシ

テニテニトバスユキツブテ
たがひによするてきみかた
イチドニドットトキノコエ

二四、雪合戰

一、晴れたる朝の雪の原、
東と西に立ちわかれ、
用意、はじめの聲の下、
手に手にとばす雪つぶて。

二、あたりてひるむ卑怯もの、
恐れず進む剛のもの、
雪を蹴ちらし、雪をあび、
互に寄する敵味方。

三、劇戰今と見るうちに、
後にひびく休戰の
ラッパと共に、西東、
一度にどつと鬨のこゑ。

近江八景

♩=88

mf

ービ

mf

ハ　ーノカリタ　チニニタ　リトテ　ソカ
ヅ　わたマデみラ　ーんノせアたキとつまレテ　クよヤ
シ　がヤからッきッ　ーのッひウチッレテ　ヤ
ッ　ョッイッ　ーッ

mf

p

ノ　ナヲオ　ヘ　ールミ　ヅ　ーウミ　ノやシカ
ガ　やくいマ　リ　ーひうつ　ーくしョシあハかシ
モ　ヲサマリ　ーテカゲ　ーキえたユるク
る　ーのあめ　にぞなを　ーえリ
バ　セヲサシ　ーテカへ　ーリ

p

f

ガ　ミノゴト　ーキミヅ　ーノオモ　アか
ハ　づのまつ　ーのいろ　ーはえて　ハヒ
ル　ヨリサキ　ーニサク　ーハナハ　ーお
た　たのうら　ーのうき　ーみだう　ーコ
ラ　ホヲオク　ールユフ　ーカゼニ

f

mf

カ　ーメナガ　メハヤツ　ーノケイ　ニまイ
す　まぬそら　ーのの　どーけさよ　三イ
ラ　ーノタカ　ネノクレ　ーノユキ　四しミ
ち　くるかり　ーもふぜ　ーいあり　五ミ
エ　ホドチカ　ーシミキ　ーノカ　ネ

1.2.3.4.　5.

mf

1.2.3.4.　5.

二五、近江八景

一、琵琶の形に似たりとて
其の名をおへる湖の、
鏡の如き水の面、
あかぬながめは八つの景。

二、まづ渡り見ん、瀬田の橋、
かがやく入日美しや。
粟津の松の色はえて、
かすまぬ空ののどけさよ。

三、石山寺の秋の月、
雲をさまりてかげ清し。

春より先に咲く花は、
比良の高ねの暮の雪。

四、滋賀唐崎の一つ松、
夜の雨にぞ名を得たる。
堅田の浦の浮御堂、
落來るかりもふぜいあり。

五、三つ四つ五つうち連れて、
矢橋をさして歸り行く
白帆を送る夕風に、
聲程近し、三井のかね。

何事も精神

♩=92

一 ノキヨリオツルアマダレノ
ハゲミーススムニナニゴトノ
二 ちひさきありもいそしめば
ふるひーすすむになにごとか

ターエズヤスマズウツトキハノ
ナドナラザランーテツセキノ
たふーをもきづきーつばめさへ
などならざらんーばんじやくの

イシニモアナヲウガツナリシ
カタキモツヒニトホスベシリ
せんりのみをわたるなり
おもきもつひにうつすべし

ソレラハヒトトウマレキテ
ましてやひととうまれきて

イツタンコーコロサダメテハ
いつたんめーあてさだめては

コートニウゴカズサツハレズ
わきめもふらずーおこたらず

二六、何事も精神

一、軒よりおつる雨だれの、
たえず、休まず打つ時は、
石にも穴をうがつなり。
我等は人と生まれ來て、
一たん心定めては、
事に動かず、さそはれず、
はげみ進むに、何事の
など成らざらん、鐵石の
堅きもつひにとほすべし。

二、小さき蟻も、いそしめば、
塔をもきづき、燕さへ、
千里の波を渡るなり。
ましてや人と生まれ來て、
一たんめあて定めては、
わき目もふらず、怠らず、
ふるひ進むに、何事か
など成らざらん、盤石の
重きもつひにうつすべし。

橘　中　佐

♩= 104

f (ラッパの様に)-　p　cresc.　f

p

一カバネハツモリテ
二みかたはおほかた
三ミクニノタメナリ

ff　p

mf

ヤマヲツキ　チシホハナガレテ
うたれたり　しばらくここをと
リクグンノ　メイヨノタメゾト

mf

p

カハヲナス　シユラノチマタカ
いさむれど　はぢをおもへや
サトシタル　コトバナカバニ

p

mf

シヤオンズイ　クモマヲモルル
つはものよ　しすべきときは
チリハテシ　ハナタチバナゾ

mf

1.2.　3.

ツキアヲシ
いまなるぞ
カグハシキ

poco ril.

1.2.　3.

二七、橘中佐

一、かばねは積りて山を築き、
血汐は流れて川をなす、
修羅の巷か、
向陽寺。
雲間をもるる
月青し。

二、「みかたは大方うたれたり、
暫く此處を。」と謀むれど、
「恥を思へや、
つはものよ。
死すべき時は
今なるぞ。

三、「御國の爲なり、陸軍の
名譽の爲ぞ。」と諭したる
ことば半ばに
散りはてし
花橘ぞ、
かぐはしき。

N 1307-3.1-4

新訂
尋常小學唱歌
伴奏附

第四學年用　定價金四拾六錢

昭和七年十二月二十七日　印刷
昭和八年　二　月十五日　發行

不許複製

著作權者　文部省

東京市京橋區銀座一丁目五番地
發行者　大日本圖書株式會社

代表者　專務取締役　杉山常次郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　大橋光吉

東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　共同印刷株式會社

東京市京橋區銀座一丁目五番地
發行所　大日本圖書株式會社
振替貯金口座(東京二一九番)電話京橋二七三番二七四番